

T A K U M I

令和6年度研修旅行 群馬・栃木 建築の旅

新島学園短期大学・ 近代建築・遺産建築 を巡る

最新建築から、歴史的遺産まで、 時代を超えて建築を体感する旅

令和6年度研修旅行は、10月26日から27日に25名が参加して行われた。今回は群馬・栃木の先進的な建築から、近代建築、産業遺産建築まで、時代や分野を超えて幅広く建築を巡る旅となった。

1日目は、普段ではなかなか見学の難しい、新島学園短期大学の新講堂を訪れ、設計監理を担当した(株)手塚建築研究所の方々に案内いただくという貴重な機会を得た。

天気にも恵まれ、山徳記念館・徳明園で神秘的の洞窟観音や美しい日本庭園を見学。午後は群馬県立歴史博物館、史跡金山城ガイダンス施設を巡り、最後は太田市美術館図書館を夜景になるまで見学した。一日盛りだくさんで建築を巡り、夜は、懇親会で親睦を深めた。

2日目の最初は、旧下野煉化製造株式会社煉瓦窯で巨大産業遺産に圧倒。群馬県立館林美術館を訪れ、雄大な自然と建築の融合を体感した。その後、香雲堂でお土産などの買い物を楽しみつつ、最後は日本最古の学校として知られる史跡足利学校を訪れて、江戸時代の学生の生活や歴史を感じた。

今回の旅は、用途、時代など、建築の性格が多岐にわたり、様々な角度から刺激を受ける大変有意義な旅となった。

光が降りそそぐ講堂を見学

新島学園短期大学では、(株)手塚建築研究所より実際に設計監理に携わった矢部氏と柳澤氏にお越しいただいた。改修した研修棟階段室、校舎棟の内装改修、新築講堂の3棟を、説明いただきながら見学した。

研修棟は登録文化財に指定される円形校舎である。特徴的なのは、中央のらせん階段。階段は最上部まで吹き抜けており、外部の光が気持ちよく差し込んでいた。上部に通気筒があり、換気の役目も担っている。



旧下野煉化製造会社 煉瓦窯



新島学園短期大学 研修棟階段室



新島学園短期大学 新木造講堂

校舎棟の最上階の内部改修には、共有スペース、ホール、和室など様々な性格を持つ空間がワンフロアに集まる。壁はホワイトボードや合板で仕上げ、学生は自由に壁面を使える。手塚建築研究所オリジナルの木製家具や木製ガラスパーティション等により、目的に合わせて利用のできるフレキシブルな空間になっていた。

最後に新築の講堂「新島の森」を見学した。木造2階建ての講堂で2階の壁面には、透彫りの木製スクリーンに空想の森が描かれている。うす曇りの日であったため、とても柔らかい光が差し込んでおり、落ち着きのある静かな雰囲気であった。透彫りは手塚氏自らが手書きしたものだという。

音響にも配慮しており、壁・天井面は反響しないように傾きをつけ、吸音カーテンを設置して、目的に合わせて響きを調整できる。また、空調も床のフローリング目地から吹き出しできるディテールにするなど、木の架構と透彫りがより活きるように細部まで洗練された空間となっていた。まさに新島学園のシンボルとなる美しい建築であった。



山徳記念館・徳明園



史跡金山城太田ガイダンス施設

研修旅行スナップ

1日目の最後は平田晃久設計の太田市美術館・図書館を訪れた。人が集う施設として、つながる場面や回遊性のある多様な空間を巡り、これからの時代に求められる公共施設の在り方を体感した。日が落ちて、夜景となった建物も大変印象的であった。

2日目最初に訪れた旧下野煉化製造株式会社煉瓦窯は、かつて赤煉瓦を生産し日本の近代化に貢献した迫力の産業遺産である。16角形の窯と煙突がほぼ原型のままで保存されており、建築物としても価値が高い。会員は煉瓦積の外壁や窯内部を興味津々で見学。窯が稼働していた当時の情景を想像したのではないだろうか。

建築体験を共有し、各会員の視点から感想や技術を語り合すばらしさを実感した旅行となった。



群馬県立歴史博物館



太田市美術館図書館



館林美術館

研修旅行日程

【1日目】(株)山二様=新島学園短期大学=山徳記念館・洞窟観音・徳明園=道の駅ららん藤岡=群馬県立歴史博物館=元祖呑龍山田屋本店=史跡金山城太田ガイダンス施設=太田市美術館図書館=宿泊

【2日目】旧下野煉化製造会社 煉瓦窯=群馬県立館林美術館=香雲堂八幡店=史跡足利学校=(株)山二様

令和6年度研修旅行【群馬・栃木 建築の旅】参加者名簿 (25名。氏名・所属。順不同、敬称略)

土本俊和・信州大学工学部教授・信州名匠会会長、高橋志行・(株)むね工房、竹節雅英・竹節俊介・(有)竹節建築、西宮武久・(株)綿内瓦工業、堀内太一・(有)泉秀園、宮内計臣・(株)宮内、犬飼栄治・(株)シナノ大理石、久保敏幸・(株)さつき苑、黄至男・(株)カネト、五明良平・奥様・(株)五明、坂田守夫・坂田工業(株)、宮下知子・サンコー特機(株)、柁津吉通・(株)ミツルヤ製作所、福島弘数・(株)北信帆布、宮本夏樹・(株)宮本忠長建築設計事務所、山崎慎一郎・(株)山崎屋木工製作所、米田満・(株)山二、笠原佑晃・(株)角藤、下崎明久・下崎建築設計事務所、池森梢・萌建築設計工房、西澤広智・小口ゆずき・中澤太一・(株)宮本忠長建築設計事務所

会員に聞く
「たくみの仕事」
Vol.33

テント、シートで時代のニーズ に応える 大阪万博に「触発」、今年4代目に継承

株式会社北信帆布 取締役会長 福島 一明氏(長野市風間)

profile●昭和19 (1944) 年11月3日、山ノ内町生まれ、80歳



新社長(手前)と語り合う福島会長(奥)

ルなどに取って代わられたという。「どれも一時必要とされ、短期間で役目を終える。そのたびに新しい需要を見つけるという繰り返しです」。

家業を継ぐ前は、金融機関への就職を予定していたが、父である先代社長の高齢化を理由に工場長から呼び戻されたという。「父からの話だったら断っていたと思う。それを分かっている、工場長に言わせただけでしょう」。入社当時はトラックの幌の製造を中心に手がけ、その後、テント倉庫や機能テントの開発に力を入れてきた。

1964 年の大阪万博で見たテント建築に「触発された」。顧客からの依頼でテント倉庫を試作。それが長野県初のテント倉庫となった。当初は建築確認が不要で、需要が急増。さらに、テントに新たな価値を加えるために、ダイキン工業と共同でテント冷蔵庫を開発し、近年は畑の畝をシートで作る「シートマルチ」を開発。このシートマルチは、東日本大震災の被災地の仮設住宅に寄付すると、「大変喜ばれた」という。

建築基準法においてテント倉庫の規定には「曖昧な部分がある」なか、仮設建築物の定義や、サウナテントなど新しい用途に「行政側での議論の必要性」を指摘。一方で、行政側にとっても、それは「難しい部分でもある」とし、「早期に顧客の要望や現場の状況を把握し、最適な解決策を提示することを目指しています」と話す。現在、海上保安庁の業務で、巡視船の周囲に取り付ける防舷材の製造を行っているという。ロープの編み方など特殊な技術が必要で、「他社には真似できない」と語る。時代の要請に応えるため、製造拠点の拡張や、多能工的な職人の育成にも力を入れていると語った。

今年4月1日には社長職を息子の弘数氏に託した。弘数社長は、以前は医療系の分野で言語聴覚士として働いていたという。「ときには経営者と話をすることがあり、父の姿を重ね、家業を継ぐことを決意した」という。「テントの自由度の高さを活かし、太陽光発電や異業種との連携、学生との共同開発などを通じて、新たな可能性を探っていきたい」と話す新社長の姿を優しく見守っていた。(栗原直良)

明治42 (1909)年創業、今年117 期目を迎える老舗企業の3代目。家業は、祖父が家具製作から雨合羽の製造に転じたことに始まる。和紙に油を塗った合羽は軽量で、携帯しやすく、旅人に重宝されたという。その後、ゴム引きの布を使った幌の製造に移行。人力車や鉄道馬車の幌を製作した。耐久性に優れたゴム引きだが、経年により、ひび割れが生じるため、職人が補修作業も行ったという。当時の顧客には宇都宮自動車販売部(現長野トヨタ)や国鉄(現JR)など、今に続く企業が名を連ねる。

関東大震災により、避難してきた印刷業者向けの資材倉庫として麻布製のテントが大量に売れた。また、戦時中には米軍の爆撃から家を守るために黒い幕を製造。戦後は、トラックの幌や日よけの製造に移行したが、やがてアルミパネル

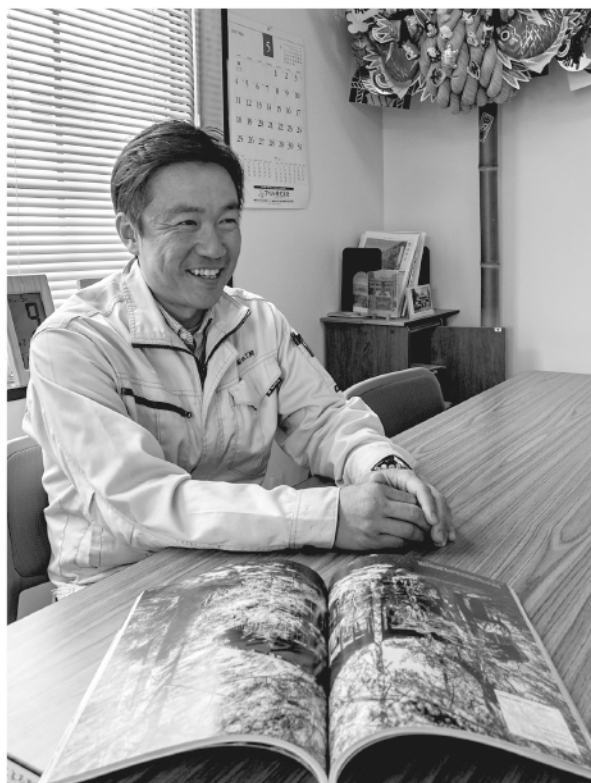


会員に聞く
「たくみの仕事」
Vol.34

伝統の技で社寺建築を 未来につなぐ 会社設立10周年、さらなる飛躍目指す

株式会社むね工房 代表取締役 高橋 志行氏(長野市若槻)

profile●昭和54(1979)年5月17日、長野市生まれ、46歳



施工した別荘が掲載された雑誌を前に話す社長

善光寺大本願や穂高神社の出入職として認められるなど、県内外の神社仏閣の新築や改修、修復工事を多く手掛けてきた。中村建築研究所(長野市)の2代目社長を務めた父の影響もあって、「小さい頃から寺を見るのが好きだった」。ただ、自身は設計ではなく、建物を建てる大工の道を選択。高校卒業後、長野技術専門校で木造建築を学び、20歳で宮大工の川又健棟梁(現寺島工務店)に師事し、腕を磨いてきた。「最初の頃は、やっぱり厳しかったです。14~15人いた弟子の中で自分が一番小僧でしたから」。時には泊まり込みの現場もあり、「料理や洗濯などの雑用は丁稚奉公みたいに、なんでもこなししました」。

思い出深い仕事は「善光寺雲上殿の管理棟」。「材木の調達に始まって、加工、墨付け、納品まで全て責任をもってやりましたね。自分でもやるけど、棟梁として、いかに人にやってもらうかを常に考えていました。あの時の経験が今に生きています」と語る。

平成26年に「むね工房」を設立。「当時35歳で、軽く考えていて。がむしゃらだったので、あまり覚えていませんが、車両もないし、身辺整理もしないとで、やっぱりお金の面で苦労しました」。令和元年には「東日本台風」(19号台風)で決壊した千曲川の水が会社を飲み込んだ。「車両も機械もダメになって」。自身が屋根を修理した神社も被害にあったという。「直したばかりで、本当にかわいそうだったので、再建も必死にやらせていただきました」。

災害に見舞われながらも、会社は順調に成長。「もう今年で10周年です」。

木造建築、中でも社寺建築を得意としてきた。文化庁が手がける案件で声がかかることもあるという。焼失した首里城の修復作業の依頼があったが、「さすがに沖縄に行きっぱなしになると、こちらで何かあったときに対応できないので、断念しました」。

東日本台風時には、ある宗教法人からの依頼で金箔張りの社殿の仕事を手がけていた。「丸柱も垂木も金箔で、とても豪華で、台風が来るというのですぐに材料を避難させて、やられずに済みました。その時の仕事が評価されて、また声をかけてもらえました。仕事を見て次につながっていくことを体感できた良いケースですね」。

最近、大手ディベロッパーが建設する都心のマンションに神社を合築する案件や、千葉県のを手がけるなど県外の仕事も多い。「県内と県外の比率は年にもよりますが、最近、ほぼ半々くらい。元請のときもあれば、下請で入るときもあります。全国に仲間がいて、横のつながりで、おかげ様で仕事が途切れずにいます」と話す。さらに、近年は軽井沢を中心としたリゾート地の別荘などで「特殊な建築の依頼も増えてきました。いろいろな地域の仕事をやらせてもらうと発見も多く、一つ一つの仕事が良い経験になっています」(栗原直良)



定例研修会●Report

(令和6年11月～令和7年4月)

令和6年度第3回研修会 【OYAKI FARM いろは堂 見学会】

開催日：令和6年11月16日(土)

講師：遠野未来建築事務所 代表 遠野 未来 氏

参加者：28名



OYAKI FARM 全景

令和6年度第3回研修会は11月16日、長野市篠ノ井にある「OYAKI FARM」で開き、設計を担当した遠野未来氏(遠野未来建築事務所代表)の説明を聞いた。

遠野氏は、設計趣旨や建設に至る背景を紹介し、参加者らは建物の空間構成や構造、自然素材や伝統技術にこだわった意匠などを各々見学した。

遠野氏によると、建設地一帯には約1万年前から人間が住み着き、縄文時代から弥生時代にかけて集落があったという。建設地のそうした背景を踏まえ、この建物では、「土から生まれ大地に還る」「自然と一体となる生命力のある」建築を目指したと紹介した。敷地全体を取り巻く円と、建物の円とで全体を構成している。

建物は、HACCP対応の工場部分が面積の8割超を占め、それ以外は、おやきの直売所とカフェを備えた建物となっている。北側は太鼓柱によるガラスのカーテンウォールとし、その真ん中にあたる正面には建設残土を使った版築壁のエントランスが建物を印象深いものにしている。

遠野氏は「木と一緒に土も木造建築に多用していきたい」と話す。その「木造」に関しては、構造材に根羽村産のスギを使い、登り梁にはヒノキを使った。手刻みによる木組みが建物全体を特徴づけている。



売店吹き抜け部見上げ



2階テラスにて土本会長(左)と遠野氏(左から3人目)

2階のテラスは「都市の中の余白」として一般に開かれた公共スペースとして位置付けており、参加者らは、見学後、テラスで昼食を取り、遠野氏を囲んでさまざまな質問を投げかけていた。

令和6年度 第4回研修会 リレートーク Vol.28 「塗装のいろは・適材適所の塗装術」

開催日：令和6年12月11日(水)

講師：(株)五明 代表取締役会長 五明 良平 氏

営業部長 宮原 博一 氏

菊水化学工業(株) 建材塗材事業部 松本営業所 所長 森田 哲平 氏

参加者：25名

長野市柳原交流センター大教室にて、(株)五明より代表取締役の五明氏、宮原氏、菊水化学工業(株)の森田氏から、建築の長寿命化やリフォーム・リノベーションの需要が増える中で、改めて塗装の「いろは」や適材適所の塗装について紹介・講義をしていただいた。



五明会長のお話



遮熱塗料の実験を観せる森田氏

五明会長より、塗装の歴史の大きな流れ、塗装材の概要をお話いただいた。菊水化学工業の森田氏からは、塗装の歴史と変遷、塗装の三つの役割(保護・美観・機能性)や、建築物の用途・歴史による塗料の変化の過程を学んだ。

塗装の種類については、塗料の種類により耐用年数や硬さ・樹脂の分類をイラストや写真を用いて、わかりやすく解説していただいた。

最後に平成から令和の塗料として、遮熱・断熱効果のある有機・無機ハイブリッド上塗料についての講義をしていただいた。有機・無機ハイブリッド上塗料の実演では、塗料を塗った鉄板を熱し、会員が触れ、実際の塗料の遮熱・断熱効果を体験した。

会員からは有機・無機ハイブリッド上塗料の施工性や省エネ効果などについて積極的に質問があがり、実務に直結する有意義な研修会となった。

令和6年度【新年会】 2025年の門出を祝う

開催日：2025年1月22日

場所：ホテル犀北館

参加者：34名

1月22日、長野市内で新年会を開催し、会員ら34人が参加。2025年の門出を祝った。土本会長は、「激動の時代が続いている。先行きが見えないが、先人が培ってき



あいさつする土本会長



歓談の花が咲いた会場

た技術を受け継ぎながら、若い世代にバトンを渡せるよう頑張っていきましょう」と呼びかけた。学生の就職状況に触れ「勉強の仕方は変わらないが、就職時の待遇が良く、初任給

をびっくりするほどもらっている。建築を教える立場としては安心できる状況」と述べた。会員同士が親睦を深め、名匠会の活動や今年の抱負を話し合った。

令和6年度 第5回研修会 リレートークVol.29「伝統工法 石場建ての家を学ぶ」

開催日：令和7年2月26日（水）

講師：小坂建設（株）代表取締役 小坂 浩一 氏
大工 柳澤 崇成 氏

参加者：20名

令和6年度第5回研修会は2月26日、長野市柳原交流センターで、小坂建設（長野市）社長の小坂浩一氏を講師に、小坂氏が茨城県牛久市で手掛けた「伝統工法石場建ての家」について学んだ。



画像を使い説明する小坂氏

昨年5月に完成した木造平屋建て、延べ84.69㎡の住宅で、採用した石場建て工法は、建築基準法で仕様が規定されていないことから、確認申請にあたっては限界耐力計算による構造適合性判定の申請を、小坂氏が自ら計算して行ったことを報告した。耐力壁には地震に強い板倉造りを採用したという。

小坂氏によると、使用した木材については長野市内の工場加工し、現地で組むだけとしたが、関東は建物を強固



建て方（柱、足固め）

にする傾向があり、許可がなかなか下りず、検査に時間がかかったと説明。二重屋根の作業は5月の梅雨時期に重なったため、雨の侵

入に特に気を付けたことや、落とし込み壁の作業では「足場が邪魔になって大変だった」といった苦労を写真をもとに紹介。伝統工法に対する氏の思いに、参加者は熱心に耳を傾けていた。

令和6年度 第6回研修会 「松代旧横田家」見学・お花見・ 陶芸教室

開催日：令和7年4月12日（土）

講師：サンコー特機（株）営業課長 白石 大陸 氏

参加者：19名

4月の研修会は、毎年恒例となっている松代での見学会・花見・陶芸教室を行った。

午前中は松代旧横田家を見学した。旧横田家は昨年度に改修工事を行い、その際に防火設備工事を担当したサンコー特機の白石氏より解説をしていただいた。

主屋の茅葺屋根を守る放水銃は、火災時には自動で高粘度液体が放水されるとのこと。高粘度の液体は屋根表面に付着することで、その後の飛び火による着火を防ぎ、かつ内部への空気の流入を遮断し、火の入り込みも防ぐとのこと。伝統的建造物を火災から守るための技術の進化を学ぶことができ、大変有意義な研修となった。

昼食は、雲ひとつない好天かつ満開の桜の下で、花見弁当をいただきながら和やかなひと時を過ごした。

午後は、松代焼の松代陶苑に移動し、各々1kgの粘土をもとに約2時間、茶碗、湯のみ、お皿等、個性豊かな作品作りに各々集中して制作をした。総会の会場で、松代焼の独特の風合いに焼きあがった作品が展示されるのが楽しみである。



旧横田家にて



旧横田家 放水銃等の説明をする白石氏



満開の桜を眺ながらの和やかな昼食



陶芸奮闘中の堀内氏